武神館　伝書

山脈（さんみゃく）

第一巻　第三号

平成五年　十一月五日発行

宗家口伝

段や級というものは、その人の技量による等級で、囲碁・将棋・柔道・詩吟などでもこの等級は用いられているということを、まず知っていただこう。[*1]

私は武道の真実に入る以前に、東洋のそして西洋の格闘技の道を歩んでおりました。東西の格闘技という言葉を用いたのは、ボクシングやフェンシングを学んでいたからです。そしてこうしたスポーツの世界でも、何回戦・ウエイト制・チャンピオンなどという階級があり、一つの世界を構成しているのですね。

武神館でも、数千年も生き続けた歴史の中には、その時代時代に適応した階級構成があったわけです。

1992年、フランス・パリで大会が開かれた際、多忙なスケジュールの合間を縫って、ルーブル美術館を訪問した宗家

さて現在はと言いますと、武神館道場忍法体術として、九流派の体術を基本とした級に始まり初段から十段位までがあります。そして十段を取った者は、古式に則った神伝八法秘剣の術を会得すべく、神伝される武門の門を叩くことになるのです。

この位は地水火風空の[*2]五段界に分類されております。この五段界は自然界をも示すもので、自然と人生のテーマの中に生きるものを示しているのです。

判りやすくこれを説明しますと、地は初伝、水は中伝、火は奥伝、風は免許、空は皆伝、ということになるのです。

空位が武神界の最高の段位ということになるのですが、ここで「空」[*3]という一字を分析してみましょう。

空と言うと、〇(ゼロ)を思い浮かべる。人間の通常の感覚では勘じない（感じない）ものなのですが、空という一字の象、大自然の姿を知ることです。宗家には段というものは今までないと申しましたが、大自然と結ばれた空間に存在し、自然意識と語り諸君に伝える天命を受けながら生活しているのです。

「空」という字をよく見ると、穴と工、穴と茎で一字になっている。結びの一字なのですね。この一字の中から「無」というエクスタシーを感じ、生命を生む自然を見ることができるのです。これは「神結び」とも言われております。

「葉隠」[*4]という書物に「武士道といふは死ぬ事と見付けたり」[*5]という一語がありますが、この一つの言葉の中には自然観が潜んでいるのだとまず知ることです。

人間には生老病死という自然現象があります。それは誰にでも起こり得るごく当たり前なことなのですが、その当たり前のことを自覚しないで、命の灯を消してしまう……それは虚実転換という真実を実行できないからなのです。

これを、神術の虚実転換と書けば、お解りいただけると思います。

五段のテストは無と有の結び目を自覚させるためのもので、十段は悪逆、すなわち自然界の生命を自ら滅ぼす原理を修徳し、神心心眼を養い、忍耐自制のできる、自然的正義を有する武神の化身が十段位の者であるということになるのです。

ここに武神の化身が、地水火風空の大自然界の格闘技を会得するために武風一貫し、永遠の正義的生命を護るという護身的武風が立証されることになるのである。

若かりし日、故・高松寿嗣先生に現宗家が稽古を付けて戴いた折りのスナップ

これで、武神館道場の十五段位というものがお判りいただけたと思います。

ではここで、私が高松先生より伝授されました流派について申し上げます。

◎ 戸隠流忍法八法秘剣　三十四代
◎ 玉虎流骨指術八法秘剣　二十八代
◎ 虎倒流骨法術八法秘剣　十八代
◎ 神伝不動流打拳体術八法秘剣　二十六代
◎ 九鬼神伝流体術八法秘剣　二十八代
◎ 高木揚心流柔体術八法秘剣　十七代
◎ 雲隠流忍法八法秘剣　十四代
◎ 玉心流忍法八法秘剣　二十一代
◎ 義鑑流骨法術八法秘剣　十五代

八法秘剣というものは、戸隠流では次のように分類しております。

一．　体術　飛鳥術　縄技
二．　唐手骨法術　柔体術
三．　槍術　薙刀術
四．　棒術　杖術　半棒術
五．　銛盤投　剣投術　手裏剣
六．　火術　水術
七．　築城　軍略兵法
八．　隠身術　木火土金水の五遁十法の術
以上を八法と言うのです。
九．　剣法　小太刀　十手術　鉄扇術
これを秘剣と言います。

この九つの法術を絶対の生命数として、これを一貫修法したのである。この八法秘剣も、流派によって内容は違ってくるものです。また時代によっても異なり、武器の進歩などに連れて、八法秘剣にも進化を見ることができます。ここに武神館の段位や級位が生きているということです。ここで進化を神化と書き、進化は奇道の変化と解きましょう。
武神館の段位は、以上のことをよく会得し、正義の段位として輝ける人生観を持った人だけに許され授けられる段位なのである。

不世出の能面師北澤如意先生が、よくこんなことを言われたそうである。「人の心に訴えかける優れた能面を打つには、技術だけが問題なのではなく、むしろ自分の品性を磨くことが大事です」と。
能面師になろうと志した者が、意を決して初めて打った面は、その作者に恐ろしいほどよく似た作品になるとも言われています。一芸を極めた能面師は、人間はその内容以上の作品は生み出せないと語り、自分を磨き高める努力が面打ちの技術よりも大切だとも言っております。

武道も忍法も、私は同じだと思います。強弱の技術よりも、自分の器を大きくすることが大事なのです。大きな眼、大眼が大願成就の秘訣なのでしょう。そこに武風を語るポエム――「強弱柔剛あるべからず　故に　此の心をはなれ　空の一字を悟り　体　また　無として　これに配す」　という自然韻を聞くことができるのです。これが武神館道場の段位・自然位の大根心なのである。

五段位のテストは、四段に合格した者だけが受けられるもので、四段位を持っていない者は、五段位の試験は受けられません。
また、五段のテストは宗家のみが行えるもので、古来から、宗家以外の者がこれを行うときは、天罰を蒙るとされております。これは現代でも変わらず、私もそれを見たことがあり、哀れを感じております。この禁忌を破った者は、一様に不幸な道へと落ちて行ったのです。

それから段級位も、武神館本部に登録されていないものは認められません。もし不審に思われる方は、本部に問い合わせてください。

一九九三年九月十八日

高松寿嗣先生

神伝宗家　初見良昭

－－－－－　編集部　補記　－－－－－

編集部の補足は、宗家や師範たちの言葉の意味を判りやすくするために付けるものであるが、次のようなわけで、今回は編集子もいささか悩んだ。

言葉の意味を解こうとすれば、仏教哲学や道教思想を解説しないわけにはいかない。しかしこれは一歩間違うと、本誌第２号で宗家が指摘した、「思想型」「宗教型」の奇形的な武芸に陥ってしまう危険があると思われた。

「五大」や「空」や「無」については、已むを得ずかなり抽象的な解説を付したが、そうしながらも、こうした形而上学的な言辞の羅列は、かえって武芸の本質を判りにくくするのではないかとの疑念を捨てきれなかった。特に、若い読者が熱心さのあまり、あくまで武芸に付随するものである「理屈」の方を過大視し、哲学の迷宮に踏み入ってしまわないかと危惧された。

以下の「補記」は、あくまでも参考であり理解の助けに過ぎないことをまずお断りしておきたい。

武道の「理論」（頭で考えること）は、決して実技やフィーリングに優先するものではないこと、体得し感得する「心」や「勘」の後に来るものであることを、忘れないで欲しい。

＊１　段級

元々は、個人の技術の習得度を判りやすく示すために、近代になって設けられた制度である。一例として、剣技についての沿革を上げれば、明治１２年（1879年）に警視庁が、剣技について七級から二級までの級を設けたのを嚆矢とする。明治の初期には、様々な流派の剣術を修行した士族階級が警察官になった。しかし、一口に免許あるいは皆伝と言っても、各流派によって授与の基準がバラバラであり、また階位の名称も流派ごとに異なっていた。そのため、その人の技量を客観的に観る基準として、警視庁独自の級を設けたものと考えられる。

剣道の段位は、明治２８年（1895年）に大日本武徳会が設立された際に、初段から五段までが設けられ、昭和９年（1934年）に初段から十段までに改められた。

この段位は、嘉納治五郎の講道館柔道が明治１５年（1883年）に五級から一級、初段から十段までの段級を定めたのに倣ったものと思われる。

武徳会が段級を定めたのは、全国的な統一基準を設けるという理由の他に、剣術などの武技の衰退を防ぐ目的があったと考えられている。

明治維新で武士階級が消滅すると共に、伝統的な武芸の修行者が激減した。一般にこの原因は、民衆が新来の西洋文化に目を奪われ、伝統を顧みなくなったためだと言われるが、そればかりではない。もう一つ、武芸の修行に金が懸かり過ぎたのも、大きな要因なのである。

例えば中西派一刀流では、一般の修行では小太刀・刃挽・仏捨刀・目録・仮名字・取立免許・本目録

皆伝・師範免許という八つの段階があった。そして一つ上の段階を許されるたびに、師範や師範代に謝礼をし、内弟子衆に祝儀を出し、家来（門人）衆に披露目をする習わしであった。これに巻物料などを加えると、平均して一両二分程度の金が懸かったと推算されている。

江戸時代は、天保ごろ（1830～40年代）になっても、月収が一両*もあれば、見苦しくない家を借りて家族四人が十分満足に暮らせると言われていた。（＊ 両は江戸時代の貨幣単位。一両小判は13ｇほどの金貨で、約六貫文［銅貨6000枚］に相当する。因みに、当時の職人の日給は200～250文ほどだった）

一両二分は、中堅勤労者の月収の一・五倍である。つまり現在の感覚で言えば、一段上がるたびに、50～60万円（5000～6000ドル）にも相当する金が懸かることになる。これでは、国中が西洋文化の吸収に夢中になっている明治の時代には、修行者が減ってしまったのも無理もない。

祝儀や披露目の宴席などの悪弊や、それに懸かる無駄な経費を省くために、段級を多くして努めて事務的な制度に改めたものと言われている。

＊２　地水火風空（ちすいかふうくう）＝五大

蛇足ながら、少々学説史的な解説を加えたい。

五大（梵 pañca bhūtāni）は、元々はインド哲学のサーンキヤ（梵 Sāṃkhya）学派が立てた原理で、万物を構成する五つの大きな素という意味である。

古いウパニシャッド（梵 Upaniṣad）哲学においては、梵我一如（梵 Brahman-ātman-aikyam。宇宙と個人は一体とする考え）の思想が有力であった。しかしこの思想には、有（梵 sat）が精神的な原理であるにもかかわらず物質構成の元ともなるという弱点があった。サーンキヤ学派はこの弱点を克服するため、純粋な精神的存在である神我（梵 puruṣa）と物質である自性（梵 prakṛti）を立て、心物を分離する二元論を唱えた。

サーンキヤ学派では、五大、すなわち地（梵 pṛthivī）・水（梵 āpas）・火（梵 tejas）・風（梵 vāyu）・空（梵 ākāśa）の五元素によって万物が構成されると考える。これは学説史的には、ジャイナ教やヴァイシェーシカ（梵 Vaiśeṣika）学派の地水火風の四元説に、虚空を加えたものといえる。

（余談ながら、ヴァイシェーシカ学派の四元説は、古代ギリシアのエンペドクレス［Empedokles］が立てた、火・気・土・水の四根説と通じる部分がある）

一方、精神世界は五唯（梵 pañca-tanmātrāni）、すなわち声唯（梵 śabda-tanmātra）・触唯（梵sparśa-t'）・色唯（梵 rūpa-t'）・味唯（梵 rasa-t'）・香唯（梵 gandha-t'）より成り、五大は五唯より生じる（それぞれ、空は声から、触は風から、火は色から、水は味から、地は香から生じる）と考える。

つまりサーンキヤ学派の思想は、心物二元論ではあるが、それは並立的なものではなく、精神を優位に置くものであると言える。

五大の考え方は、初期大乗仏教にも取り入れられていたが、唯識論では、心までを含めてすべての存在は識の映像が顕現したものに過ぎないと考えるので、五大という概念は次第に重要視されなくなり、五唯をさらに進めた五境という考え方が現れる。境（梵 viṣayaあるいはartha）とは「認識作用の及ぶ範囲・対象」といったような意味で、唯よりも定常的ではない、より抽象的な概念である。

もっとも日本の仏教には、真言密教のように、五大（物質）に「識」（人間の精神活動）を加えた六大という思想を示すものもある。真言宗の開祖空海は、六大は堅・湿・煖・動・無碍・了知の性を有する本体であり、同時に前記の現象（物質）に転じて認識されるとする、六大縁起論を唱えている。

＊3「空」（くう）

ここで宗家は、五大の概念における「空」（梵 ākāśa。空虚）から仏教的な「空」（梵 śūnyaまたはśūnyatā）へと、認識を切り替えている。

「大般若経」などに見られる「空」――漢訳仏典では空寂・空浄・空無などと書かれ、またサンスクリット語の音をそのまま写した舜若・舜若多なども使われる――は、元素論の空（梵 ākāśa）や虚無（梵 abhāvaあるいはnāsti）とは根本的に異なる。

大乗仏教で「空」と言う場合、人空（にんくう）・法空（ほうくう）の二空がある。（上座部仏教には法空を認めない派がある）

人空とは、自我（梵 ātman）は実在しないということである。つまり、自我あるいは個人の精神は、変転する識の投影として連続的に現れる仮象に過ぎず、実体としては存在しないという考えである。

法空とは、万物には自性（じしょう）（梵 svabhāva。物質の主体的個性）は存在しないということである。諸法（一切の現象）はすべて因縁（いんねん）（梵 hetu-pratyaya。結果に対する原因。因［hetu］は直接的原因、縁（えん）［pratyaya］は間接的原因）によって生起し、万物（万象）は、縁起（えんぎ）（梵 paratītya-samutpāda。相対的な依存関係の作用）においてのみ認められ、実体はないとする考えである。諸法は存在しまた消滅して行くように見えるが、それは因縁によって現象として現れたものであるから、その実相（じっそう）（真実の相、本質）は不生不滅（ふしょうふめつ）、不増不滅（ふぞうふげん）である。

竜樹（Nāgārjuna。150?～250?。南インドの僧侶・哲学者。大乗仏教の思想的基礎を確立した人物）は、その著、「中論本頌」において、まず縁起を説いて諸法に自性が存在しないことを解き、そこから「空」の概念を導き出す。そして「諸法皆空」を悟るところから執（しゅう）（梵 abniniveśa。自我やものに捕らわれることによって生じる迷い）を去り、涅槃（ねはん）（梵 nirvāna。仏教の最高目的で、一切の苦悩を超越し、精神の平安を得た境地）に至ると説く。

このように、仏教の「空」は実在を否定する概念ではあるが、決して虚無主義に陥るような消極的な考え方ではなく、むしろ有と無という二者対立の考えを止揚（ヘーゲル哲学のaufheben）した、中道の思想である。

これを端的に表現しているのが「般若心経」の始めの方の数句、「色不異空　空不異色　色即是空　空即是色」である。ここに言う「色」とは、形質を持って現れる一切万物をさす。

万物は空に他ならず、空もまた万物と違うものではない。万物は（因縁によって生じた現象であるから）すなわち空であり、（人間は因縁によって現れた現象を物質として認識するのであるから）空はすなわち万物である。

「空」は、実体のあるものではないから無であるが、現象としては現れるから有でもある。有（実体）でも無（虚無）でもなく、また有でも無である。つまり「空」は、有か無かという二元論を越え、同時にそれらを包含する、より高次の概念なのである。

この「空」の思想を理解するためには、「ミリンダの問」（パーリ語 Milindapañhā。漢 那先比丘経。日本語訳は平凡社の東洋文庫に「ミリンダ王の問い」の題で収められている）が、格好の教科書になるだろう。

これは、紀元前二世紀に北インドを支配したバクトリアの王ミリンダ（メナンドロス Menandros。漢 弥蘭陀）が、インドの高僧ナーガセーナ（パーリ語 Nāgasena。漢 那先）に仏教哲学について質問する形の対論集である。

ギリシア哲学をもって質問する王に、ナーガセーナがインド哲学の立場で答える形なので、東洋哲学に不案内な人にも判りやすく、またプラトンの対話編のような構成になっているので、他の多くの大乗仏典と違って、たいへん読みやすい。まだ大乗の「衆生済度」の思想には至っていないが、「空」の思想と「唯識論」の初期的な概念は平明に説かれている。

＊　以上の補足は、宗教や哲学の用語として一般的に理解されている解釈であること、武芸の奥義とは別であることを、繰り返し強調しておきたい。

宗家は「空」について、「武風的に解けば、これらの思想にハーモナイズする『風』の音を聞くこともできるものだ」と言われた。これに関しては、追々当「山脈」誌上で宗家が解説してくださるだろう。

＊4　葉隠（はがくれ）

全十一巻の武道修養の説話集で、正式には「葉隠聞書」といい、俗に「葉隠論語」「鍋島論語」とも言う。肥前国佐賀藩の藩士山本常朝が出家後に語った内容を、同じ佐賀藩の祐筆（秘書官）であった田代陣基が筆記したものといわれ、享保元年（1716年）に成立している。

その内容は、「武士道といふは死ぬ事と見付けたり」の一語に代表される、極端な尚武思想に貫かれているが、これは当時江戸や京阪で勢力を持ち、地方にも浸透し始めていた、儒教的な武士道論に反発してのことと考えられている。

＊5　武士道といふは死ぬ事と見付けたり

「葉隠」の中の最も有名な一句である。宗家の意図的な拡大解釈は、原義よりもはるかに高尚な理念になっている。編集部としては、原文を理解しておくことも無駄ではないと考えるので、ここに前後の数節と現代語訳を掲載する。

武士道と云は、死ぬ事と見付たり。二つ二つの場にて、早く死方に片付ばかり也。別に子細なし。胸すわって進む也。図に当らず、犬死などいふ事は、上方風の打上たる武道なるべし。二つ二つの場にて、図に当るやうにする事は及ばざる事也。我人、生る方がすき也。多分すきの方に理が付べし。若図に迦れて生たらば、腰ぬけ也。此境危き也。図に迦れて死たらば、気違にて恥には成らず。是が武道の丈夫也。毎朝毎夕、改めては死々、常住死身に成て居る時は、武道に自由を得、一生落度なく家職を仕課すべき也。

（現代語訳）

武士道というものは、死ぬことだと理解できる。生か死かの二者択一を迫られる場合には、素早く死の方を選択するだけである。別に難しい理屈は要らない。ただ度胸を据えて進むのである。そのやり方が上手く行かなかったら犬死にだなどと言うのは、都会風の上品ぶった武道であろう。生か死かの場合に、上手く行くように計画することは不可能である。誰でも、生きるほうが好きである。（だから）多分好きなほうに理屈を付けてしまうだろう。もし（計画を立てて）思い通りにことが運ばずに生き残ってしまったら、臆病者である。この境界は微妙である。（死ぬ方の道を選んで）上手く行かずに死んだとしても、短慮だと言われるだけで恥にはならない。これが武士道の確かな有り様である。毎朝毎夕、改めて死を決意し、常に死に身になっているときには、武士道は自由になって、一生失敗もなく自分の職務を果たすことができるのである。

さらに「葉隠」の主旨を鮮明に浮かび上がらせるには、山本常朝が嫌悪した儒教的武士道と対比して考えるのが良いと思われるので、編集部がまとめたそのエッセンスを、主に山鹿素行の士道論と比較しながら述べてみたい。

江戸幕府が成立して世の中が平和になると、戦いの専門家であった武士は、その存在の意義が問われるようになった。平和な時代における武士の役割の見直しが求められるようになったのである。士農工

商の身分制度の中で、農民や職人が生産を受け持ち、商人が流通を受け持つとすれば、武士は社会的にどのような使命を担うのか。その思想的回答として、儒教的な士道論が登場してきたのである。

国を治めるのは将軍や大名だが、武士は君主に従いまた助けて、彼らを支えるのが役目だとされた。民衆が自らの欲望のままに振る舞えば社会は混乱する。素行は、武士にはその混乱を防ぎ、民衆を人道に則って生きられるように教化して、社会を正しく導く責任があると説く。そのためには、武士は民衆の模範となるように、道徳的に町民や農民よりも優れていなければならないのだと説くのである。

素行は朱子学の「文治主義」を批判し、「文武一体」「武治優先」を説いたが、その武は「不殺不死」であり、戦わずに威によって服せしめる「武徳」を武の上策とした。これは、「警察軍」の思想であり、「武力も備えた行政官僚」の倫理であるといえる。

山本常朝は、このような時代の趨勢に、武士道が「戦場という非日常的な場での実践倫理」から「支配階級の日常的道徳・行動規範」に変質して行く傾向に、強く反発したのである。

常朝は、武士はたとえ日常の仕事が書類いじりであっても、常住死身に徹しなければならないと説く。死を真正面から直視し、常に死と対決し、君命とあらば、あるいは必要とあらば、いつでも死ねる覚悟を求める。そして常に死身に徹すれば、その行為もおのずから武士として恥ずかしくないものになると説くのである。

もちろん儒教的な士道でも、死を目の前にしても怯まない姿勢は求められる。だがそれは人倫の「道」を貫くための覚悟であって、「葉隠」に見られるような、「生への執着」に対する激しい蔑意はない。むしろ「生」が愛しい貴重なものであるからこそ、それを投げ出すところに価値があると見る。

また主従関係においても、儒教的士道論が「君臣の義」を自覚し、それを実践することが「忠」であると説くのに対し、「葉隠」は君主と家臣との情誼的結合から発する忠義を説く。

さらに常朝は、規範化された士道では「臣たる者の道」に反する行為として厳しく誡められる「私闘」（喧嘩）さえも否定しない。「武士の一分」のためには、喧嘩も已むを得ないと言い、喧嘩をするにも「死狂」の心組みで臨めと説くのである。

誤解を恐れずにやや強引に簡略化するならば、「葉隠」の説く武士道は、「死」を見つめる非常時の覚悟を日常にも求めるものであり、「死」と直面するところから生じる強烈な美意識であると言えよう。

＊　この「葉隠」と「士道論」との対立に関して、宗家は次のように語られた。

「『葉隠』と江戸時代後期の士道の違いは、『真剣型』『通常型』という言葉によって表現できるかも知れない。戦国時代から続く士風と平和な時代の新しい士風の差は、対立と言うより、北風から南風へと武風が変化する過程と見るべきであろう。一方には常に戦争を忘れまいとする故老の想いが、また一方には戦争のない平和な世に生きている軍人の苦悩や葛藤が見られるのである。南北双方の武風を受けながら、編集部の資料を参考にすることである。この一遍にも、武風の輪廻の娑婆を見ることができるであろう」

宗家の好意的な解釈を誤解されると困るので、蛇足を承知で少々付け加えたい。

山本常朝は鍋島家に書物方として仕えた人物である。戦国の気風に強く憬れていたが、彼自身は実戦を経験したわけでも、武芸の達者だったわけでもない。従って常朝の説く「武士道」は、武芸の奥義とは何の関係もない。さらに「葉隠」に対しては、江戸時代から、「泰平に狎れた思想家の観念的遊戯」あるいは「実践の伴わない空論に過ぎない」と酷評する意見も有力であったことを付記しておく。

武神館の段位について　武神館本部　事務局

宗家より段位の説明がありましたので、ここで武神館の段級位を示す段位章について、少々説明いたします。武神館におきましては、帯の色によって有段者（黒帯）と級位以下の人を区別できるようになっていますが、柔道などとは違って、帯の色によって有段者を区別するようにはなっておりません（当流では初段の人も十段の師範もすべて黒帯です）。

その代わりに武神館では、左胸に付けるワッペンの色と星の数によって、一目で段位が判るようにしてあります。以下、それぞれのワッペンを具体的に示します。

級　位

左の図が、級位の人が胸に付けるワッペンです。

ワッペンの直径は９センチ（これは段位のものも同じです）、縁と文字は白、地は赤です。

初段～四段

左の図が、初段から四段までの人が胸に付けるワッペンです。

縁と文字は黒、地は赤です。段位は、ワッペンの上に付ける白い星の数で見分けられるようになっています。

星の数は、以下のようになっています。

初段　……　星無し
弐段　……　星一つ
参段　……　星二つ
四段　……　星三つ

五段～九段

左の図が、五段から九段までの人が胸に付けるワッペンです。

縁と文字の縁取りは銀、文字は黒、地は赤です。段位は、やはりワッペンの上に付ける星の数で見分けられるようになっています。

星の数は、以下のようになっています。

五段 …… 星無し
六段 …… 星一つ
七段 …… 星二つ
八段 …… 星三つ
九段 …… 星四つ

十段以上

左の図が、十段以上の人が胸に付けるワッペンです。

縁は水色、文字は緑色、地は橙色です。

十段以上の地・水・火・風・空の各位も、やはりワッペンの上に付ける星の数で見分けられるようになっています。

星の数は、以下のようになっています。

十段 …… 星無し
地位 …… 星一つ
水位 …… 星二つ
火位 …… 星三つ
風位 …… 星四つ
空位 …… 星五つ

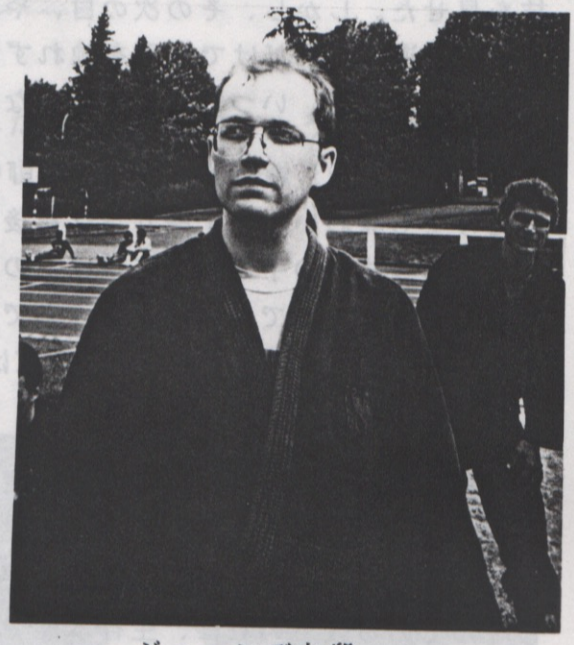
これらのワッペンは本部にありますので、必要な人は士道師や道場長、または直接本部に申し込んでください。ワッペンも星も、本部が発行したものしか認められません。

＊ なお、ワッペンは材質の関係で洗濯はできません。日本の士道師たちは、マジックテープなどを利用して、胴着に付けている人が多いようです。こうすると、取り外しが利くので便利です。

ウエルバ大会の神業

ベン・ジョーンズ　七段（英国）

「無」[*6]。昔の禅僧が「犬に仏性はあるか」というような質問に対し、よくこのように答えたらしい。要は「そんなことを聞いても、質問自体が無意味なので意味のある答えを期待するのが可笑しい」ということ、あるいは「無分別」の省略であると私は解釈している。私が小さいときから「不思議な東洋」に憬れた所以はここにあると思う。



ジョーンズ七段

質問されたら「はい」、「いいえ」で答えるという（西洋の？）常識から全く離れている世界である。一瞬「気違いではないか？」と思いがちであるが、深く考えたら徹底した論理に基づいている。私は日本語の「こんにちは！」さえ分からなかったときから「MU」という文字を知っていた。

例えば、ダグラス・ホフシュタターの有名な本、「ゲーデル、エッシャー、バッハ：永遠なる金モール」の中にはとても印象的なイラストが入っている。小さいところを見たら左に「還元法」、右に「全体論」という文字（英語）が読み取れる。もう少し視野を広げるとこの言葉自体が左に「全体論」、右に「還元法」という文字を構成している。

要するに、この二つは陰陽のような関係にあり、相互依存している。どちらが正しいかは言えない、両方ともないといけない。しかし、イラスト全体を見たら、なんと「MU」という形になっている！　還元法・全体論の分別もなくなり、最初からそのように考えるのは幼稚であると私は解釈した。

ウエルバ大会でこれを思い出させる出来事があった。すでにそれについての個人的な感想をペドロ・フレイタスさんが「山脈」２号で述べているが、人の見方・感じ方はそれぞれ違うので、私なりにその時感じたことを書き残したいと思う。

ペドロさんが書いたように、宗家は棒投げを一回見せた後、もう一度その変化を見せようとしていた。今度はまっすぐ投げるのではなく、途中でいきなり回転させたのである。気が付くと、相手の野口先生が見事に躱した棒は彼のすぐ側にいた人達にも当たらないで、彼の後ろの地面に落ちていた。

大会の三日目、野外で稽古をしていて結構暑い日でもあったので、はっきりいって大会の参加者は皆（私も含めて）疲れていてあまり集中していなかったと思う。一瞬唖然とした後、盛大な拍手が沸き上がったのである。そしてそれと同時に、皆がお互いに顔を見合って、「見た？　分かった？」と聞いていた。

私が初めて宗家に会ったときにも、同じ様なことがあった。アメリカの大会で起こったことである。宗家がある日、大会の参加者に「質問はありますか？」と聞いたら、誰かが

「空気投げ」を依頼した。日本から一緒に来た師範とでは嘘に見えるかもしれないし、現地の人とでは危ないかもしれないので宗家はとぼけて、屁で人を倒すというとても滑稽な技を見せた。しかし、その次の日、やはり皆が疲れてあまり集中していないときに、アメリカの士道師を声だけで（手を触れずに）倒したのである。その時も私は、「さすがにタイミングが良い、いつでも油断できないことをよく指摘してくれているのだ」と思った。

ウエルバでは、その後宗家がすぐ「アホガー！」（プレー！）と言ったので、私はまず形だけでも味わい、フィーリングを後で掴んでみようと思ったが、片手で投げたのか、それともも う片方の手を添えて投げたのかさえ分からなかったので、宗家に聞いてみた。

その時「どっちでもいい、どっちでもできる」というような答えが返ってくるであろうと少し予想していたのであるが、宗家は「そういう質問には答えない。技じゃないから。」と答えた。

私の質問がこのようにあっさり否定されたので、私は和尚さんに「無」といわれた気持ちであった。自分なりに解釈したら、「こういう技は考えて発揮するものではない、意図的に作り出すものではない。むしろ実戦の時に自分の中から何か（自分を守る霊や神通力と呼んでいる人もいれば、生存本能や潜在意識と呼んでいる人もいるであろう）が押さえきれなくなり、どっと激発してきて、初めてこういうことができるのである。」

神業（神技）という言葉がぴったりであると思う。神様（どの宗教のでもいい）が宇宙をどのように創ったかと聞かれたら、きっと「無」と答えるであろう。

＊6　「無」（む）

禅宗は仏教の一派であるはずなので、禅で言う「無」は、諸法の無実体性を強調するために「空」を言い替えたものである、と一般的には理解されている。しかし、禅は中国で発達し、やがて日本でさらに深化された思想であるから、仏教哲学の「空」の概念に、中国の道教思想の「無」の考え方が混入し、かなり判りにくいものになっている。

ここで道教思想の「無」の概念を、仏教哲学の「空」と比較しながら、少々説明したい。

無を有より優位に置く考えは、老子において初めて登場する。例えば、かすみ網で鳥を捕る場合、実際に鳥を捕らえるのは網のほんの一枡であるから、残りの部分は鳥を捕るという目的からは役に立っていない。しかしその無駄になる広い網がなければ、鳥を捕らえることはできない。これを老子は「無用の用」と呼んだ。また老子は、「有は無より生ず」と言って、有の上に無を置く。

しかしこれでは、「有を生む無は何から生まれたのか」という疑問が生じ、その「無を生んだもの」は何から生じたのか……と、際限のない循環論に陥ってしまう。

そこで、老子の後に登場した荘子は、「何から生じたか」「何が生んだか」という疑問そのものを否定する。無は生みも生まれもしない。ただなんら属性を持たない絶対的な無（無窮）と定義する。

では、有とは何か。荘子は、有を「無を有限化したもの」と考える。喩えて言えば、空間には果ても大きさも形も目的もないが、それを四角く壁で仕切ると、部屋という有限の存在が現れるようなものである。つまり、無が宇宙や自然の基本であり、それを何らかの形で限定した結果が有だと考えるのである。

この「無」の考えは、一見、仏教の「空」と似ているが、実際はまったく違う。「空」が「有無」を越えた観念であるのに対して、道教の「無」は「有」をその一部と見做す考えであって、決してその上位概念ではない。

荘子は、人為や作意を「不自然」であるとして、「無為」「無作為」に、自然のままに、なるがままに身を委ねることで平安を得ようとする。つまり道教の「無」は、自然と一体となるための思想的根拠であると言える。

これは、諸法・諸色から離れるための概念である仏教の「空」とは、決定的に異なる。というより、正反対の考えだといえよう。

禅の思想は、「空」の延長である仏教的な「無」と道教的な「無」とが交錯し、その微妙なバランスで成り立っているため、西洋の伝統的な形式論理学では、分析できなくなっている。だからこそ禅では、「不立文字（ふりゅうもんじ）」「以心伝心（いしんでんしん）」を重要視するのであろう。

＊　なお、武芸の世界でよく耳にする「剣禅一如（けんぜんいちにょ）」「武禅一如（ぶぜんいちにょ）」という言葉について、宗家に伺ったところ、「『剣禅一如』とか『武禅一如』などは一つの流行り言葉と考えてもよろしいし、また、陰陽・表裏一如が虚実であるというフィーリングで読んでみなさい」との答えが返ってきた。これらに関しても、今後段階を追って当「山脈」誌上で説明してくださるだろう。

回想録

玉虎　間中文夫（十段）

光栄にも、宗家より武神館伝書「山脈」に載せるための記事を書くように命ぜられた。内容は、私が武神館の武道を始めてから十三年目の頃に、米軍特殊部隊「グリーンベレー」のメンバーと試合をした時の話である。

一九七三年（昭和四十七年）、私は、青森県八戸（はちのへ）市に駐屯する第五高射特科群（地対空ミサイル部隊）に勤務していた。私の勤務する部隊は、アメリカにおいて毎年ミサイル射撃を実施するが、この部隊はこの年に初めて東北地方に新編されたため、いろいろな問題を抱えていた。その中の一つに語学の問題があった。そこで我々は、近傍の米空軍三沢基地の将校と交流を持ち、英語の勉強を兼ねて文化の交流を行おうということになった。

英会話教室のオープニングセレモニーにおいて、私は群長から依頼されて、忍法の演武を実施した。このパーティーのお客様の中に、ベトナム帰りのグリーンベレーのメンバーがいたのです。

1993年９月に開かれたアルゼンチン大会に、宗家に随行して参加し、実技指導を行う間中師範（左）

週に一度、英語の勉強をしながら休憩時間に忍術や古武道全般の説明をしたのですが、そのうちに「自分の部下に、ナイフをたいへんうまく使う軍曹がいるので、ぜひ一度会って欲しい」ということになった。私もグリーンベレーにはたいへん興味がありましたので、ＯＫをしました。

後日、少佐がシュナイダー軍曹を伴って、英語を教えるために八戸駐屯地に来ました。私は、生まれて初めて、精鋭米軍グリーンベレーの兵士に会ったわけです。

彼は、予想に反して、スリムな身体をした紳士的な人柄の非常にハンサムな男でした。しかしやはり全身からは、血を吸ったばかりのピューマのような、凄い妖気を感じました。

英語の勉強が終わった後、私は軍曹を宿舎前の芝生に案内し、「虎倒流壁刀の型」を展示説明しました。軍曹は鋭い目で見ていましたが、「私ならこのようにする」といった感想を述べ、「このような場合は、どうするのか」というような質問を投げかけてきました。そこで私は、木製の小刀を彼に渡し、好きなように切りつけるように言いました。

彼のナイフ捌きはとても素晴らしく、その技に圧倒されて、当時の私の技量では、とても飛び込んで行くことはできませんでした。そこで私は、相手の攻撃をじっと待ちました。

最初は、右手から左手へ、左手から右手へとナイフを素早く持ち替え、横に払いながら一気に間合いを詰めて、素早い突きがきました。私は自然の構えから僅かに体を左にかわし、彼の手を「表逆」に握り、右拳にて「打ち」、ナイフを飛ばしました。次いで彼の右腕を「大逆」に捕り押さえました。

彼がもう一度やりたいと言うので、相手をしました。今の戦いで、おおむね彼の技の雰囲気が理解できていましたので、今度は私が先手を取りました。私は「肉を斬らせて骨を斬る」[*7]作戦で、間合いを詰めながら、左手を思い切って相手の間合いにさらしたのです。彼は、素早く非常に動きの少ない方法で切り付けてきました。私は彼のナイフを無視し、左手を引きながら一気に虎倒流「飛倒」の技で彼の「仏滅」を蹴りました。これが、自分でもびっくりするくらい見事に決まり、彼は仰向けに倒れました。

「もう一度やりますか」と尋ねますと、今度は「もうその必要はない」と言いながら小刀を返しました。

彼は私たちの武道の一端を理解したらしく、この後は、掌を返すように今までの態度を改めて、私に対し「サー」をつけて話すようになりました。もちろん私は、これまでと同様に敬愛の態度で接しました。

さらに私たちは親密になり、彼の休日には私の官舎に招待して共に食事をしたり、手裏剣の投げ方を教えたり、逆にアメリカ式のナイフの投げ方を教わったりして、楽しい時間を過ごしました。

後日、彼のアパートに招待された時のことです。彼のグリーンベレーの友人三人が、アパートで我々の到着を待っていました。初めはいろいろな世間話をしていましたが、食事が終わってから、A軍曹が「私はフェンシングが得意です。キャプテン間中は、武道がたいへん上手だと聞いています。フェンシングをやってみませんか」と挑戦してきました。

私はフェンシングのルールを教わりましたが、フェンシングの動きではなく、自分の動きでやることを了解してもらいました。

フェンシングの剣の名前は忘れましたが、一応、相手と同じ構えを取って試合を始めました。そのとき初めて判ったことですが、フェンシングはほぼ直線上を前進後退するのみで、横への変化がほとんどありませんでした。

彼の突き・払いはさすがに鋭かった。そこで私は、相手が突いて出てくるところを横に変化して胸に突きを入れました。するとこれがポイントになりました。彼はびっくりした顔でシュナイダー軍曹を見ていましたが、キャプテンのポイントであると再度言われて納得したようです。この後は、私のペースで相手にポイントを与えることもなく、A軍曹との勝負は、私の一方的な勝ちで終わりました。

次に、フェンシングの種類を換えて、切るタイプの剣での試合となりました。またルールが少し変わったものの、私にとってはほとんど問題ありませんでした。試合そのものは、前回と同様に私が勝ちました。

これを見ていた大男のB軍曹が、今度は自分がやりたいと申し出てきました。彼は、私

の動きをそれまで十分に観察していたため、A軍曹のようなわけにはいきませんでした。鋭い攻撃の後、間髪を入れずに退がるので、付け入るスキがなかなか見出せず、何分かの時が過ぎました。この状況を打破するために、私は彼に対して、積極的に突きの連続攻撃を仕掛けました。彼は後退して私の攻撃をしのいでいましたが、さすがに実戦の勇者、私の攻撃の手が止まった瞬間、私の胸を鋭く突いて来ました。私は咄嗟に体を落とし、剣を真っ直ぐに突き出していました。私の剣は彼の「仏滅」に突き刺さっていました。「九鬼神伝流秘剣　付込」の技が美事に決まったのです。

彼は、この一本で勝負あったと見たのでしょう、それ以上はやろうとしませんでした。

彼も私も本当に疲れ、肩で息をしていました。握手をしてお互いに健闘を讃えあいました。でもこの時私は、正直なところもう一度やったら多分負けるだろうと思いました。残ったC軍曹は、私に挑戦してきませんでした。

この後、四人に対し何回か体術を教えましたが、さすがに歴戦の勇者たちと感じさせる、凄いパワーであったことを思い出します。

いよいよ彼らが帰国する時がきました。私が彼らに、八戸名物の「八幡駒」をプレゼントしましたところ、シュナイダー軍曹は私に、彼がベトナムでかぶっていた、血が染み込んでいるグリーンベレー帽をくれました。この帽子は、今でも武神館本部にあります。

最後に私は、基本がいかに大切であるかを、皆さんにもう一度言いたい。技はそんなに多く覚える必要はありません。ただ、いろいろな流派の技を基本に忠実に練習することが、非常に大切なのです。咄嗟の時に出る技は、非常にシンプルです。日本では、「芸」を身に付けるためには、まず「守」、次いで「破」、最後に「離」の三段階を経ることが大切な事となっています。

初見先生も三十数年前は、「守」の段階であったためか、基本を丁寧に教えてくれました。そういう意味では、この二十年くらい前から始められた方は、不幸かも知れません。いや、途中を飛ばしていきなりミラクルテクニックを教えていただけるのですから、反対に幸せかも知れませんね。

世界中の士道師の皆さん。弟子に技を教えるときは、基本の技を、十分に時間を掛けて繰り返し繰り返し教えた方が良いでしょう。初心者が「変化技」に走ると、上手くなったような錯覚に陥るようです。でも戦えば恐らく破れるでしょう。

ただし、これは私の持論（経験論）です。意見の異なる方に、押し付けるつもりはありませんので誤解の無いようにしてください。

『千早振る　神の教えは　永久に　正しき心　身を守るらん』

＊7　肉を斬らせて骨を斬る

古くから使われている諺で、自分もダメージを受けるのを承知の上で、相手にそれ以上のダメージを与えようとする捨て身の決意を表す。

強く表現するときは、「皮を切らせて肉を斬り、肉を斬らせて骨を斬り、骨を斬らせて命を断つ」とも言う。犠牲を恐れず断じて行う覚悟を示す言葉として、武芸の伝書などにも好んで使われている。

これは一九九二年の六月に米国アトランタで大会が開かれた際、現地の新聞社が宗家を紹介した記事（右　写真）の全文訳である。

グレン・シェリーのスポーツ記事

穏和な手がこの星を導く

SPORTS

Sports 2

GLENN SHEELEY'S SPORTSLITE

Gentle hands rule the planet

Martial arts expert Masaki Hatsumi (left), a grandmaster of ninjutsu, times attacker Bud Mahnstrom

ゴルファーなら、こんな類似を引くことができるだろう ― ボビー・ジョーンズがまだ生きていて、あなたのローカルなドライビング・レンジで、三日間クリニックを開くのだと。そしてあなたがそこにいることができて、ゴルフにおける最も良いスイングの持ち主から、指導を受けられると想像してみなさい。

作曲家なら、ジョン・レノンから講習を受けられたらと夢想するだろうし、絵描なら、パブロ・ピカソと教育的な週末を持てたらと。武芸の愛好家にとってなら、グルー（ヒンズー教における導師。転じて信奉者の多い指導者の意）はドクター良昭・初見だ。

そしてこの伝説は現在も生きている。 実際に、健康に生きているのだ。

オムニ・ホテルの、テッド・ターナーがときどき使うスイート・ルーム ― そこは一晩一七〇〇ドルもする ― で、初見は、１９９２年アトランタ大会 ― そそれはタッカーにあるバッド＆ボニー・マルムストローム武芸スクールの支援で開かれた、世界的な忍者のトレーニング大会で、三〇〇人の愛好家を街に集めた ― の始まりを待って、寛いだ金曜日を過ごした。

マルムストロームはアメリカで最高位にランクされる指導者である。

忍術の三四代宗家であり六十歳になる初見は、この星を導く。彼はまた芸術家でもあり、彼の絵は一〇〇〇〇ドルで売られる。彼は大人向けや子供向けの忍術の本の執筆者でもあり、ビデオの作家でもある。「ジライヤ」という題の、忍者版ロビン・フッドのような日本のテレビシリーズにも出演している。

「日本では、彼は国の歴史的な秘宝のように扱われている。」と、彼の通訳であるイスラエル人のドロン・ナボンは言う。

彼は、日本では一部の人々には、そうした力と優雅さを象徴する、ほとんど宗教的な人物のようにみなされているが、初見は率直であり愛嬌がある。彼は、金曜日に彼のスイー

ト・ルームの次に、ケーブルテレビの戦争映画を観にＣＮＮセンターを訪れた。彼の笑顔は暖かい。彼の手は、それが致命的な武器であるにもかかわらず、握手の際には柔らかさを残す。彼は、一般市民の忍者に対する認識に関して、ジョークを言うのが好きだ。彼は「シックス・フラッグ」に新しく載った「忍者　ジェットコースターの黒帯」の話をするときも微笑んていたし、「ミュータント・ニンジャ・タートルズ」（突然変異忍者亀。コミックやファミコンから出た人気キャラクターの映画版の二作目で、ヒスパニックや黒人の少年のような、陽気な性格のカメたちが活躍する物語）の映画を観て楽しみもした。

「問題なのは」彼は微笑み、頭を傾けながら言った「忍者は亀にはなれないということだ」

通訳に彼は野球ファンかときくと、初見はそのスポーツを少年のようにプレーすると説明してくれた。アトランタ滞在中に、ブレーブスのゲームに参加するつもりはないかとたずねたら、忍者の三四代宗家は、「もし私に暇があれば、『ゴールド・クラブ』に行く方が良いね」と彼の通訳にこたえた。

彼の来客に便宜を図って、「センセイ」はマルムストロームを相手に、特別なデモンストレーションを行うことに同意してくれた。数分後、初見はどっしりした伝統的な忍者装束を着てベッドルームから戻ってきた。彼は衣装の下には、「キュート・ボーイ」と読めるＴシャツを着込んでいた。

「たとえ六〇歳になっても」彼は言った。「あなたは依然可愛い（キュートには「機敏な」との意味もある）少年でいることができる。私のアートは、いつでも楽しいものなのだ。私は、まさに大人になった忍者亀だ」

その朝、数百の武芸の生徒 ── その１５パーセントは女性 ── が初見の下で勉強するために街に集まっていたが、チャック・ノリス（米の空手アクション・スター）が作るようなマッチョ（筋肉質の）な人柄を見ることはなかっただろう。彼らは、素晴らしいユーモアを備えた、敏感で複雑な人物を見るだろう。このような訓練された動きで見せるのも、いつか気軽におどけたポーズを見せるのも、同じ師なのだ。

ホテルの部屋のドアがノックされると、初見は両手をその動作に均衡させながら、勢い良くそちらに向かった。彼は大会のアシスタントの一人が入ってくると笑った。今から月曜まで、ルームサービスのボーイは戸惑いとショックに見舞われるだろう。

生きる武勇伝

武神館本部　編集部

武神館の本部には、毎日世界の武友から多くの便りが寄せられます。その中には、武神館の武芸の徳によって危機から逃れられたという体験を報告し、宗家や武神に感謝を述べているものも少なくありません。

以下、いくつかの例を掲載しますが、その前に宗家のコメントを紹介しておきましょう。

私はいつも、「武道を修行していて良かった、生きていて良かったと感じる瞬間を持てるような人間性を養いなさい」と言っている。この武友たちが経験したことは、花情竹性というものが、愛と正義と度胸とによって顕現された例であり、すなわち花情竹性という一語の真実性の証明である。

1　アメリカ・ニューヨークのシャン・アスキュー（Sean Askew）氏の例

ある時、彼が映画館に入ると、麻薬を吸っているらしい男が喧嘩を売ってきた。初め、彼は相手にしないようにしていたが、猛獣のように攻撃してきたので、やむなく反撃した。男が逃げ出したので彼は席に着いた。やがて十数人の男たちが彼の方へやってきた。この先は、彼の言葉を引こう。

映画館の席に座り映画を観ていると、十数人の男がわめき散らしながら私を取り囲みました。その中には、逃げて行った猛獣野郎もいたのです。

突然、首の後ろあたりに鳥肌が立つような感じがしたので、席を蹴って飛び上がりました。その瞬間に、猛獣野郎が私の背中にナイフを刺していたようです。

一人が私の顔を殴りました。私は即座に背中に刺さっていたナイフを自分で抜いて、十五人の相手と戦いました。その中の強そう奴二人をダウンさせると、十三人のハイエナは逃げて行きました。

翌朝警官が、病院に入院した私のところへ、逮捕した五人のハイエナを連れてきて、事件の様子を尋ねました。「シャン君、本当に君一人で十五人を相手にしたのか？」と訊くので、私はそうだと答えました。ハイエナ五人も怯えた様子でそのとおりだと言ったので、警官もやっと信じたようでした。

シャン氏は、「初見先生に、生きる武道を教えていただいたお陰で、生きることができました。感謝します」という手紙と共に、元気な姿の写真を宗家の元に送ってきました。

2　アメリカのラルフ・セビア（Ralph Severe）八段の例

私が修行した武神館の技が、二カ月前に役に立った事を先生にお知らせしたいと思います。私の背中に男がピストルを突きつけて来ました。男は私に強盗を働こうとしたのです。彼が私を脅して来た時、ピストルが私の頭に当てられていることを感じました。私は体の向きを変え、ピストルの狙いから外れる位置に素早く動き、男の手首を表逆に取り、ピストルを奪い取り、そのピストルで男の顔を殴りました。この時点で、男は体を返して暗闇に逃げ去りました。私は男を追跡しないのが最良の方法だと思いました。

ピストルを警察に届け、書類に必要事項を記入したところ、警察は私の事を信じられない様子でした。何故なら、このような状況から逃げられるものなど一人もいないというのが彼らの解釈だったからです。

私は警察に、自分はラッキーだ、何故なら初見先生の生徒の一人だからだと説明しました。私の技と私の人生のために、先生に感謝したいと思います。ありがとうございます。

3　アメリカ・カリフォルニアのデイヴィッド・C・古川（David C Furukawa）四段の例

私はジャック・ホーバンさんの道場で、１９８３年からずっとトレーニングしています。最近四段に昇進しました。今年の十月にワシントンD.C.で五段のテストを受けたかったのですが。

二週間前、私はひどい交通事故にあいました。私は後ろから約100 Kmの速度で追突され、反対車線に飛ばされました。その瞬間、私は助手席から外に飛び出してしまいました。

古川四段と大破した氏のピックアップトラック

事故の前、私は飛鳥回転を何度も何度も練習していました。そのお陰で、私は今、生きています。初見先生の本、ビデオ、そして個人的な指導に感謝いたします。

しかし、私は首の骨を骨折し、肩と腕が麻痺し、背中を悪くしました。現在私は、ワシントンD.C.の大会には行けないと思います。

初見先生の忍法の教えが私の命を守りました。

デイヴィッド・C・古川

宗家より古川氏への返事

一命を取り留められて善かったですね。

ここで、受身についてお話ししましょう。受身には顕在（はっきりと現れて存在する）受身と、潜在（表に現れないで潜んでいる）受身との二つがあります。そして顕在意識の術、潜在意識の術によってこれを構成転換し、作動させるのです。もちろん、超感覚的意識や、今はやりの「気」から発する受身もあるでしょう。

しかし私の経験や、高松先生から教えを受けた感覚から、受身の極意について語るならば、真心と度胸と慈心をもって毎日を生活している武道家ならば、神から本当の受身・奇蹟の受身を授けられるということです。

デイヴィッド君も、神から受身を授かったのでしょう。これが受身の極意なのです。

私もデイヴィッド君の回復を祈っています。

宗家　初見良昭

＊　世界の武友の皆さん。宗家と共に、古川氏の一日も早い回復を祈りましょう。

この他にも、例えばイギリスのピーター・キング（Peter King）十段（左　写真）は、路上で刃物を持って暴れている暴漢を、一人で素手で取り押さえて逮捕し、勲章をもらった話などが報告されています。

もちろん、武芸の修行をしているからといって、自ら危険に飛び込むような人は（警察官など、職業柄そうしなければならない人は別として）武神館にはいないはずですが、武芸の徳によって、不意に襲ってきた事故や危険から逃れられたという経験を持つ人は、少なくないでしょう。

そうした経験をした方は、ぜひ本部に報告してください。

あるいは、稽古の時のミステリアスな経験や、宗家に稽古を付けていただいた際に多くの人々が経験する、不思議な感覚に対する感想なども歓迎いたします。

（勝手ながら、そうした報告も日本語で書き送ってください。繰り返しますが、日本語で書かれたもの以外は、原則的に当「山脈」誌上には取り上げられません）

山脈発刊の主旨

宗家

世界的細菌学者の野口英世は、幼いころから郷里にある山を眺めては、「いつか俺は、あの山のような大きな人になるんだ」と叫んでいたそうです。

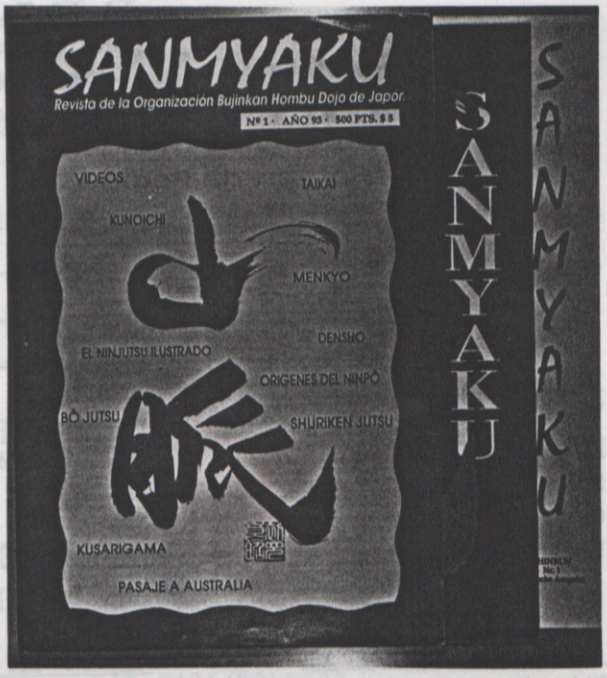
私が「山脈」を発刊したのも、世界の武友たちが山のように大きな人になって、和した山脈となってほしいと考えたからです。

したがって「山脈」は、世界各国ごとにその国の言葉に訳され、武神館の機関誌というかたちになっていますが、私は内容的には、武風的伝書としての色を濃くしているつもりです。

この山脈は、まず一つの国に一つの山脈として存在しているわけです。この一つの山脈を、武神館機関誌の支局としております。

その支局長は、私が任命させていただきました。

「山脈」は現在十数カ国語に翻訳され、各支局から、それぞれ独自の体裁で刊行されております。お読みになりたい方は、次に紹介する「山脈」支局に問い合わせて購読してください。



各国で出版されている「山脈」の一部。装幀やデザインなど、国ごとに工夫が凝らされている。

＊　次頁に、本部と各国支局の連絡先を紹介します。
この十六ヵ所が、現在宗家より正式に認められている支局です。ここに掲載されていない支部の本は不正なものです。本部では無断転載を厳禁しており、悪質な物には法的手段を講じますので、発見した場合は、本部またはもよりの正規支局に連絡してください。

＊　なお、新たに支局が誕生する際には、その都度当「山脈」誌上で紹介いたします。

山 脈　本部と支局のお知らせ

SANMYAKU　Information of the head office and branch offices

本 部　The head office

日本
武神館道場本部
〒278　千葉県　野田市野田636
TEL　0471-22-2020
FAX　0471-23-6227

JAPAN
BUJINKAN DOJO HOMBU
636 NODA NODA-SHI CHIBA-KEN JAPAN　〒278

支 局　Branch offices

U. K.
Peter King
108 Godstone Road,
Purley, Croydon,
Surrey, CR8 2DE
U.K.

SPAIN
Pedro Fleitas González
C/Eduardo Dato
9 - 35200 Telde
Gren Canaria(Canary Islands)
SPAIN

TEL (928)69.43.51
FAX (928)68.04.64

ARGENTINA
Daniel Hernández
Avenida Mitre 3233-1605 MUNRO
Buenos Aires
ARGENTINA

TEL 756-0207

U. S. A.
WIN Publishing
P.O. Box 30338
Stockton
Ca, 95213
U.S.A.

NORWAY
Elias Krzywacki
Dr Graeslivei 5a
N - 4011 Stavanger
NORWAY

TEL 04 / 5625 36

FRANCE
Arnaud Cousergue
7, Villa Raphael
91860 EPINAY s/Sénart

TEL 1.60.47.20.02

GERMANY
Steffen G. Fröhlich
Philipp-Reis-Str. 13a
D-63128 Dietzenbach 2
GERMANY

BELGIUM
Benedikt Sas
Nachtegalenstraat 7
2300 Turnhout
BELGIUM

TEL 014 / 41.50.57

ITALY
Enzo Rossi
Via Venosa
1-20137 MILANO
ITALY

TEL 02 / 55.13.651

SWEDEN
Sveneric Bogsäter
Duistervoordseweg 27
7391 CA TWELLO
THE NETHERLANDS

TEL (0)5712-757 32

HOLLAND
Mariette van der Vliet
Duistervoordseweg 27
7391 CA TWELLO
THE NETHERLANDS

TEL (0)5712-757 32

AUSTRALIA
Ed Lomax
2/5 Avondale Street
CLARENCE PARK
S.A. 5034
AUSTRALIA

TEL (08)271-5192

ISRAEL
Dron Navon
Haprahm - St 3
Kiryat - Shaul
Ramat - Hasharon
ISRAEL 47321

TEL 927(3)49382

PORTUGAL
Ernani Pinto Bastos
P.O. Box 99
8000 FAro
PORTUGAL

GREECE
Koasta Dervenis(ΚΩΣΤΑΣ ΕΡΒΕΝΗΣ)
Taigetou 6
Kiffisia 14562
GREECE

IRELAND
Steve Byrne
21 Carrigmore PK
Aylesdury
Tallaght
IRELAND

編集後記

武神館伝書「山脈」の第三号をお届けいたします。今回は、武芸の徳によって危機から逃れられた武友の逸話を、幾例か紹介しました。読者の皆さんも、そうした経験をお持ちならば、どしどし本部宛てに投稿してください。

日本国内版は、今号から、版形がやや大型化しました。これは、国際的な規格に合わせるための措置です。

一号、二号と大きさが変わってしまったので、通してファイリングしたいと思っている方にはややご迷惑をかけたかと思います。しかし一号、二号についても、再版の際に同じＡ４サイズに組み直す予定ですので、不便を感じられる方は、新版を購入してください。再版は、来年早々にも行われる予定です。

編　集　部

〒278　千葉県野田市野田636　Tel 0471(22)2020

武神館本部道場事務局

編集長　林　　靖之

武神館伝書　「山脈」　第三号

平成五年十一月五日発行

発行者　初見良昭

発行所　武神館道場

千葉県野田市野田636　〒278

Tel 0471(22)2020

FAX 0471(23)6227

＊ 許可なくして複製・転載を禁ず

武神館ビデオ注文書

題　　名	単　価	送　料	本数	小　　計
1．虎倒流骨法術	¥ 6200	¥ 500		¥
2．高木揚心流柔体術	¥ 6200	¥ 500		¥
3．九鬼神伝流鎧組討	¥ 6200	¥ 500		¥
4．玉虎流骨指術	¥ 6200	¥ 500		¥
5．戸隠流忍法体術	¥ 6200	¥ 500		¥
6．神伝不動流打拳体術	¥ 6200	¥ 500		¥
10．九鬼神伝流半棒術・仕込杖	¥ 6200	¥ 500		¥
11．忍法・初見良昭ビデオ道場	¥ 6200	¥ 500		¥
12．武芸者のための十手術	¥ 6200	¥ 500		¥
13．忍者秘剣	¥ 6200	¥ 500		¥
14．大光明祭・武神館国際セミナー 1	¥ 4800	¥ 500		¥
15．大光明祭・武神館国際セミナー 2	¥ 4800	¥ 500		¥
16．六尺棒術	¥ 6700	¥ 500		¥
17．大光明祭・武神館国際セミナー 3	¥ 4800	¥ 500		¥
18．大光明祭・武神館国際セミナー 4	¥ 4800	¥ 500		¥
合　　計				¥

住所　　都道府県　　区市町村

氏名

電話番号

◎ 注文者の住所・氏名・電話番号は、必ず記入してください。

◎ 下の宛先を切りとって、封筒に張って使ってください。

◎ 現金書留で送金してください。　＊

◎ 送料は、国内は全域１本500円ですが、海外の場合１本1000円となります。

＊ 例えば１本7200円のビデオを銀行振込小切手で注文された場合、日本円の場合でも銀行の手数料 600円が差し引かれます。ましてドルなどの外貨の場合、振込の手数料に両替の手数料が加わって、2600円も差し引かれてしまいます。
こうした手数料が本部の財政を圧迫しているという事情がありますので、必ず現金で、それもなるべく日本円で送金してください。
ビデオに限らず、日本語版の本などを注文する際にも、またワッペン・星などの徽章その他を本部に直接請求する際にも、現金書留で送ってください。

〒２７８
千葉県　野田市　野田　６３６
初見 良昭　先生

〒２７８
千葉県　野田市　野田　６３６
初見 良昭　先生

武神